



TITLE:

# 紅巾考 : 中國に於ける民間武装集團の傳統

AUTHOR(S):

相田, 洋

---

CITATION:

相田, 洋. 紅巾考 : 中國に於ける民間武装集團の傳統. 東洋史研究 1980, 38(4): 569-596

ISSUE DATE:

1980-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153761>

RIGHT:

# 紅巾考——中國に於ける民間武裝集團の傳統——

相 田 洋

- 一 はじめに
- 二 「紅巾」の起源
- 三 「紅巾」の展開
  - (1) 「紅巾」と『水滸傳』
  - (2) 元末の「紅巾」
  - (3) 明清の「紅巾」
- 四 おわりに

## 一 はじめに

中國の民衆鬪争は、「陳勝・吳廣の亂」以來、二千年以上の傳統を有し、多くの特徴が見られるが、かなり高度な軍事性なども、その一つに擧げることが出来るように思う。日本の江戸時代の百姓一揆などは、「人を殺害する道具をもたないことが多<sup>(1)</sup>」く、ほとんど非武裝の状態であつたといふ<sup>(2)</sup>。これに對して、宋代以降の中國では、民間に多くの武裝集團が存在し、これらが民衆鬪争の軍事面を指導し、權力との力による非妥協的な鬪争を展開しているのである。毛澤東の遊撃戦法や「鐵砲から權力が生れる」という有名なテーゼなども、中國におけるこのような民間武裝の傳統と切り離しては理解し難いと言えよう。それ故に、中國の民衆鬪争史研究には、これら民間武裝の傳統の考究が不可欠である。しかしながら、從來、これらの分野についての研究は皆無に等しく、今後の大きな課題として殘されているのである。

そこで、本稿では、中國の民間武裝集團と關係が深いと考えられる「紅巾」を中心に、中國民間における武裝の傳統の一端を垣間見たいと思う。

## 二 「紅巾」の起源

「紅巾」といえば、一般には、元末のそれがすぐ思い浮かぶようで、概説書などでは、「元末の反亂」全體を「紅巾の亂」と呼んだりすることが多い。しかし、中國の民衆鬭争において、そのメンバーが「紅巾」（赤い頭巾）を被る習慣は、かなり長期間にわたって見られるのである。

「紅巾」の起源については、既に、南北宋交替期であるという説が重松俊章によって提唱されている。<sup>(3)</sup> この重松の見解は卓見で、動かせないところであろう。しかし、重松の研究は、元末の「紅巾軍」が中心であり、その起源の問題は副次的に取扱われているにすぎず、史料的にも十分とは言えない。また、中國の學界でも、この南北宋交替期の「紅巾」について言及したものは、かなりあるが、いずれも断片的に「紅巾」に觸れているにすぎない。<sup>(4)</sup> そこで、まず、この南北宋交替期の「紅巾」についてみてみよう。

重松は、「紅巾」を民衆反亂軍が徽號として使用した最も早い例として、宣和二年に、睦州に起った「方臘の亂」を舉げている。<sup>(5)</sup> しかし、方臘軍では、「紅巾」は六等級の徽號の一つにすぎず、しかも最下位のそれで、とてもこれを後世にみられる「紅巾」の起源とするわけにはいかない。「紅巾」についての最も早い史料は、管見の範圍では、重松も引用している「韓蘄王碑」<sup>(6)</sup>の記事のようである。

この記事は、概略、次のようなものである。韓世忠は、「欽宗即位の初め」、梁方平に従って、黄河防衛のために濬州に赴いたが、當時、既に金軍が州境に迫っていた。しかし、方平は、「他盜」と思い、防備を怠っていたので、世忠が忠告すると、かえって方平の怒りを買ひ、偵察に出されるはめとなった。世忠は偵察中、金軍と遇戦し、歸って報告したが、

方平は、「猶ほ以って紅巾の賊と爲し、備へを設」けなかった。それで、とうとう金軍は侵入し、方平は單身逃亡した。この梁方平が濬州に赴いたのは、宣和七年の十二月壬子（十五日）で、逃亡したのは、翌年の靖康元年の正月二日である。それ故に、宣和末には、「紅巾」が黄河の北岸の濬州附近に出没していたことが知られよう。

この外、「紅巾」は、南北宋交替期には江北の各地に出没していたようである。例えば、

時に、河東の民、心に本朝（宋朝）を懷ひ、所在に結びて紅巾と爲り、出でて城邑を攻め、皆建炎の年號を用ふ。身脱して南歸する者有るを見れば、往々、助くるに衣糧を以ってし、且つ言ふ。「只、天兵の河を過ぎるを俟つも、亦、多きを須ひず。當に聲勢を藉りて、盡く敵人を執へて、之を戮さんとするのみ」と。金衆の河東に在る者、稍々遷りて以って北去す。金の兵械も、亦甚しくは精ならず。但だ、心を協せて力を齊へ、奮ひて死を顧みず。故に多く勝ちを取る。然れども、河東の人、「これ」と習熟し、略も、懼るる所無し。是の年、澤・潞の間に、左副元帥尼雅滿の寨を刼し、幾んど之を復さんとす。故に、「金」、紅巾を捕ふること急なり。然れども、その眞を得ること能はざれば、則ち、平民を捉へて以って責めを塞ぎ、舉村害を被る者有り。故に、強壯なる者多く奔りて以って命を逃れ、而して紅巾愈す〔熾〕んなり。（熊克『中興小紀』卷二、建炎元年十二月條<sup>(4)</sup>）

とあるように、河東即ち山西でも、「紅巾」が出没し、南宋の年號を使用したり、金支配下の諸都市や金軍の砦を攻撃したりして、ゲリラ的に金軍に抵抗している。この山西の「紅巾」の根據地の一部は、西南部の中條山にもあったらしいが、その中心は太行山にあったようである。前掲の『中興小紀』では、太行山の西麓の澤州や潞州の間の金軍の砦を攻撃しているが、同じ頃、潞州の北方の襄垣縣方面でも、「紅巾」が出没した史料もあるし、また、紹興の初年には、「太行紅巾」の首領ら數名が金軍に投降した記録もあるのである。

また、河北でも、「紅巾」が出没していたようで、建炎二年に金に使いした魏行可が、出會っている。彼は、「河北、紅巾賊、甚だ衆し」と聞いていたので、その攻撃を恐れていたが、「紅巾賊」は、宋の「使旌」を見ると、溫和しく引き

下ったという。この「河北紅巾」も、太行山から東に出撃してきたものかもしれない。

その外、「紅巾、山東に蟠結す」とあるように、山東でも、「紅巾」は相當の勢力を持っていたようである。

また、淮北・淮南の各地でも、「紅巾」が活潑に活動していたらしく、かなり頻繁に記録に見えている。例えば長蘆（江蘇六合縣附近）の崇福禪院の行者普倫らは、建炎四年頃、金軍の侵入に對する自衛の爲に武裝團を結成していたが、彼らも、「紅巾を襲ひ、紅幟を立てていたというし」、「高郵の賊李在」なども、「紅巾」を着けていたらしい。また、虹（安徽泗縣）や安豐（安徽壽縣）、均州（湖北均縣）附近などでも、「紅巾の賊」が出没していた記録もある。その外、乾道の初年頃には、「邇來、淮北の紅巾、多く界を過ぎりて、剽劫す」という記録も残っているのである。

以上、南北宋交替期には、江北のほぼ全域にわたって、「紅巾」の活動が見られるのである。當時の江北は、金の侵入により、淮河以北は金の支配下に入り、淮南もしばしば宋・金の爭奪の戦場となり、金軍や宋軍の敗殘兵達の恣いままの侵掠にさらされていた。それ故に、人々は、自分の身は、自分の手で守らざるを得ず、互いに團結して、各地で種々の武裝集團を組織するに至った。「紅巾」もこれらの武裝集團の一つであったと考えられよう。

それでは、このように江北の各地に出没した諸「紅巾」はお互いにどのような關係にあったのであろうか。残念ながら、詳しいことはほとんどわからない。ただ、前述のように、太行山が有力な根據地の一つであったことが知られるだけである。しかし、これら太行山の「紅巾」と山東や淮北・淮南の「紅巾」との關係もわからない。むしろ、各地の「紅巾」は、それぞれ獨立しており、相互の間の組織化・系列化は、ほとんど行なわれていなかったのではないかと思われる。それは、例えば、「李成の黨」の周虎と、「水賊」の邵青とが、蕪湖縣で戦った際、最初は兩軍とも「紅巾を以て軟纏」し、いて、見分けがつかなかった等という話によっても窺えよう。

では、各地の「紅巾」の共通點は何か。各地の「紅巾」のほとんど唯一の共通點は、「赤い頭巾」を被って、金に對抗する武裝集團というところであらう。それでは、何故に、反金武裝集團が、「赤い頭巾」を被るのであろうか。南北宋交

替期の「紅巾」に觸れた重松や中國の諸學者が、全く、この問題に言及しないのは不思議である。それ故、以下、若干、それをみてみよう。

私は、この「紅巾」は、前後漢交替期の「赤眉」や後漢末の「黃巾」と同様の一種の異装であると思う。民衆鬪争における異装の役割りはいろいろあるが、集團の内部と外部との區別を明確にして、内部の團結を強化する點などが、まず擧げられよう。また、異装は、日常性の否定の象徴でもあり、演劇などと同様に、民衆が日常的世界を脱出し、非日常的世界に飛翔するための手段ともなり得ると考えられる。その外、中國では、これらの異装が、五行思想に基づく、政治的なスローガンの機能をも果す場合がある。即ち、中國では、五行説により、各王朝は、木火土金水の中のいずれかの徳があるとされ、これらの徳に對應する色彩を尊重する習慣がある。それ故に、火徳とされる漢帝國の復興をスローガンとする「赤眉」などでは、火徳に對應する「赤」色を集團のシンボルとして使用したという。私は、「紅巾」の「紅」にも、これと同じような意味があるように思う。というのは、宋朝では、

有司言ふ。「國家は周禪を受く。周は木徳なり。木は火を生ず。當に火徳を以て王たりて、色は赤を尙び、臘は戌を用ふべし」と。これに従ふ。(李燾『續資治通鑑長編』卷一、建隆元年三月壬戌條)

とあるように、國初に、火徳を王朝の徳とし、火徳に對應する赤色を尊重することを規定しているからである。紹興元年には、金軍の侵入に對して城を棄てて逃亡した知州が、罪を免がれるために、「敵營驚き傳ゆ。《紅笠を戴きし人、寨を却かす》と。これ火徳勝捷の象たらん」と上奏して、皇帝から「その佞を惡」まれ、免職となる事件が起っている。これなども、「赤」が宋朝の色であるという認識を前提とした珍事であろう。また、南宋の最初の「建炎」という年號なども、この火徳に基づいて、制定されたという。<sup>80</sup>「紅巾」軍の中には、前掲の『中興小紀』に見える「河東の紅巾」のように、この南宋の「建炎」という年號を使用しているものもあり、金支配下の江北で、レジスタンスを續けていた武装集團が、その民族鬪争のシンボルとして、宋朝の色である赤色を掲げるのは自然であろう。

金末元初、山東を中心に、北は河北、南は江北、西は太行山にわたる地域で、金や元に抵抗した所謂「紅襖の賊」なども、その標號として、「紅」色を掲げている。私は、この「紅襖」も、「紅巾」の一種ではないかと思っている。というのは、「紅襖」は、「紅巾」よりも時代的にはやや遅れるが、地域的にはほぼ重なり、同じく、金や元などの異民族支配に對する民族鬭争の標號とされているからである。また、前掲の長蘆の崇福禪院の「紅巾」のように、「紅巾」と「紅幟」とをセットとして標號にしているものもあるし、「潑李三」の李寶の集團のように、「緋幟頭巾」と「緋幟袍」とを標號にしている集團もあるのである。それ故に、「紅巾」は必ずしも「頭巾」だけに限らず、「紅襖」や「紅幟」などをも含めたものと考えるべきであろう。

次に、「紅巾」の内部構造についてみてみたいが、詳しいことはほとんどわからない。しかし、前掲の「紅巾」や「紅襖」を標號とした諸集團の中で、邵青、李寶や李全などは、かなり有名であるから、その集團内部は、多少、窺える。また、邵青と争った「李成の黨」の周虎についてはわからないが、彼が「紅巾」を掲げていたから、その親集團の李成集團も、劉豫の傀儡政權に投降する以前は、「紅巾」を標號としていたものと思われる。それ故に、これら、邵青・李寶・李全・李成の集團を手がかりに、「紅巾」集團の内部について、若干、みてみたいと思う。

これらの諸集團に共通するのは、その指導者が、武術に秀れた、任俠的性格の持ち主であるということである。例えば邵青は元來「稍公」であつたが、平生、「竊盜」をしており、「甚だ、その黨徒の心を得」ていたというし、李寶も、若い時から「無賴」で、「氣節」を重んじ、「潑李三」と呼ばれている。また、李全も、「羣不逞と結びて義兄弟と爲り、任俠狂暴」で、長さ七、八尺・重さ四十斤の鐵槍を振りまわし、「李鐵槍」と呼ばれているし、李成も、「重さ七斤」もの刀を兩手に振りまわし、「向うところ」敵がないほどで、「驍勇を以って聞え」、「言笑寡く、然諾を重んじ」、「仁義を假行」して、「能く衆心を得」ていたという。それ故に、「紅巾」集團では、これら任俠的關係が、組織の中核となつていたといえよう。

中國では、任俠的な關係は古代から存在するが、宋代以前と以後とは、かなり質的な相違があるようである。例えば、古代の任俠的な關係は、「主・客」という、どちらかという上・下の支配・隸屬の關係に比重が置かれているのに對して、宋代以降のそれは、前掲の李全集團などのように、「義兄弟」という比較的對等に近い關係に比重が置かれているのである。このような「義兄弟」的な結合が、何時頃から出現したか、詳しいことはわからないが、管見の範圍では、宋の太祖趙匡胤が節度使の楊光義らと「義社兄弟」を結んだというのが、「義兄弟」の早い例のようである。そうすると、唐末か、五代頃ということになる。

この唐末・五代という時代は、皮日休のように、父母に盲目的に服従する古代的な「孝」に對して、嚴しい批判を加えた思想家が出現したり、武人達の間では、假父・假子という擬制的血縁關係を結ぶのが流行するなど、古代的な血縁關係が動搖・變化し始めた時代である。そして、また、この時代には、舊い血縁的な結合に代る新しい仲間結合も芽ばえつつあったのである。それが、「社邑」あるいは「義社」などと呼ばれる、佛教信仰に起源をもった、日本の「講」のような組織である。「義兄弟」も、前掲の「義社兄弟」等からも窺えるように、このような「社邑」の中から出現してきたものであろう。

唐代までの混亂期の自衛集團では、「鄉黨」「宗族」といった地縁的・血縁的な關係がその結合の紐帶をなしていたが、唐末以來、こういう傾向は次第に見られなくなり、南北宋交替期になると、この「義兄弟」的結合等が民間武裝集團内の一般的な結合形態となるに至ったようである。例えば、邵雲は、蒲城が金人に陥された時、「少年數百を聚め、山谷に壁して」、時々、出撃していたが、たまたま擧兵した邵隆と、「約して兄弟と爲った」といふし、「勇力羣を絶し」、「張莽蕩」と綽名された張用も、曹成、李宏、馬友らと「義兄弟」となり、數萬の「衆」を聚めている。また、韓世忠の部下であった李彥先は、世忠軍潰滅後、海に入って「衆を聚め」、楚州にあって、「威勇一方に振」っていた趙立と「臂に刺して義兄弟とな」っているし、京師の「百司健兒」であった李孝忠なども、開封陷落後、「衆を聚め」、李孝義・李孝成ら九人と



「義兄弟」となっているのである。

ちなみに、「義兄弟」と言うと、桃園で、劉備・關羽・張飛の三人が、「義兄弟」の契りを結び、白馬黒牛を屠り、天地に盟いを立てる、『三國志演義』の所謂「桃園結義」が有名で、後世の「會黨」等の仲間結合のモデルとされている。<sup>(4)</sup>しかし、元來、『三國志』には、「先主（劉備）、二人（關羽と張飛）と寝れば、則ち牀を同じくし、思しむこと兄弟の若し」（卷三六）等とあるだけで、「桃園結義」は見えていないのである。この『三國志』の場合、劉備と關羽・張飛との関係は、「兄弟」のようであっても、あくまで上・下の君臣關係の枠内であり、「義兄弟」という對等に近い關係ではないのである。現存文獻中、「桃園結義」がみえる最も早いものは、元の至治年間に刊行された『全相三國志平話』であろう。しかし、宋代には、『說三分』という三國志語りの専門の講釋師たちが出現し、盛んに「三國志」を語っていたというから、（孟元老『東京夢華錄』卷四）、この「桃園結義」の場の原型なども、當時の民間武裝集團をモデルに、彼らによって作られたのではないかと思われる。

それはともかく、次に、「紅巾」集團の構成員についてみてみたいが、これも詳しいことは何もわからない。ただ、李成集團では、（李）成、その衆を率ゐること數萬。各々、老を攜へ幼を扶けて、河東を渡りて朝廷に歸す<sup>(4)</sup> などとあるように、成人男子のみではなく、老人や幼兒をも含んだ、戦亂で寄る邊のない流民達が主なるメンバーであったようである。

次に、「紅巾」集團と南宋政權との關係をみてみよう。前述のように、「紅巾」の「紅」は火徳である宋朝の色であるが、現實の南宋政權と「紅巾」集團との關係は微妙である。金朝支配下で塗炭の苦しみの中で呻吟していた江北の人々にとって、南宋政權の存在は、一條の光明であり、救いであつたことは確かであろう。それ故に、南宋の年號を用いたり、南に走る人々が絶えなかつたのである。しかし、南宋政權にとって、「紅巾」など、「群盜」の一つにしかすぎないのである。金との緊張關係にある時には、若干、利用價值があるが、緊張が弛むと、有害無益の代物となる。權力にとって、民衆の武裝が危険なことは、金朝も南宋朝もかわりがないのである。<sup>(4)</sup> その點、「紅巾」側でも、リアルに認識しているものもい

たように、邵青などは韓世忠から招安された時、一應受け入れたが、赴かず、「我、方に賊たり、其の下皆窮まる。恐らくは用ひられざらん。故に動く可からざるなり」などと言っているのである。そして、李成や李全等が、宋朝に對して、「反覆常ならざる」のは、ここに大きな原因があると考えられよう。それ故に「紅巾」の「赤」色も、具體的な現實の南宋政權を指すというよりも、寧ろ、もっと抽象的な、民衆の心の中の民族・國家を象徵していると考えた方がよいと思われる。この點、南北宋交替期に、「忠義巡社」「忠義軍」あるいは、「淨明忠孝道」などと、盛んに使われている「忠」という言葉などと、共通するように思われる。というのは、「忠」と言っても、現實の宋朝の皇帝に對する忠誠よりも、寧ろ、中國の民族や國家一般に對する忠誠という意味が強いといわれているからである。

以上、「紅巾」は、南北宋交替期に、金の支配下の江北で起つたが、南宋も中葉になると、江南にも及んだようである。嘉定十二年閏三月には、金軍の侵入の混亂に乗じて、漢中の興元府の「軍士」の張福・莫簡らが、「紅巾を以て、首を蒙ひ、紅巾隊と號し」て「反亂」を起し、四川に侵入したが、六月には鎮壓されている。この「亂」の詳細については、わからないが、金軍の侵入に抵抗するという意味から「紅巾」を掲げたのであろうか。また、寶慶元年の正月には、湖州の潘壬・潘丙・潘甫ら兄弟が、「太湖漁人及び巡尉兵卒」「販鹽の盜」を率いて、李全と響應すると「僞稱」して、鎮王竑を擁して「反亂」を起している。この「反亂」も、「紅襖の賊」の李全と響應すると稱しているから、多分、「紅襖」を着ていたものと思われる。このように、「紅巾」は次第に江南にも擴がり、

湖南は、大兵・大旱の後、繼ぐに月椿の重飢を以てし、又、州郡縣道、人を得ること鮮きに緣つての故に、民力大段に困乏し、怨咨日に甚し。村落の窮民、私に緋衣巾を製し、以て盜の起るを俟つ者有り。(胡寅『斐然集』卷一八、「寄張相書」)

などとあるように、民族的抵抗のシンボルとしてよりも、民衆の權力に對する抵抗のシンボルへと轉化しつつあったようである。このような傾向は、民衆の武裝の當然のなりゆきと言えよう。

南北宋交替期の江北では、「紅巾」をはじめとする多数の武裝集團が出現したが、これらは前述のように、任俠的な色彩の濃い指導者によって率いられ、メンバーも流民が多かったようである。それ故に、これらの武裝集團では、一般の農民などとは、行動や習俗の面でもかなり異なつた獨自の世界を形成するようになってゐる。例えば、邵青集團などでは、妊婦の腹を裂き、胎兒を取り出して吉凶を卜うなどといったことが平氣で行なわれていたといふ。

次に、そのような南北宋交替期の武裝集團内で一般的に行なわれていた獨特の習俗の中で、「紅巾」や「義兄弟」以外に、後世の武裝集團に對して、大きな影響をもつと思われるものを二、三、擧げておこう。

その一つは、入墨の風習である。宋代では、漢代に廢止されていた罪人に對する墨刑が復活されたり、五代から始つた兵士たちの逃亡防止に入墨する制度が通例化するなど、入墨の風習はかなり一般化するようになってゐる。そして、南北宋交替期の武裝集團でも、このような風潮を受けて、入墨は頻繁に見えており、武裝集團内で、一種の習俗化していることが窺える。例えば、前述のように、李彥先は趙立と「臂に刺して、義兄弟」の契りを結び、王彥に率いられて、太行山を根據地に金に對して激しく抵抗した所謂「八字軍」では、兵士たちの顔に「赤心報國、誓殺金賊」と入墨していたといふ。また、壽春の「卒丁」出身の「丁一箭」の丁進に組織された集團でも、「皆、六點或ひは、入火の二字を刺し」ていたし、山東の「盜」の「白氈笠」の劉忠は、「自ら其の額に黥し」、「花面獸」と呼ばれるなど、この種の例は、ほとんど列擧の煩に耐えぬほどである。

もう一つは、食人肉の風習である。食人肉は、中國では古來、飢饉の際などに行なわれていたやうで、「人相食」という文字が史書に散見している。しかし、南北宋交替期の武裝集團ほど頻繁に食人肉を行なつてゐる例は、以前には見あたらないように思ふ。例えば、山東の「巨寇」の官儀や王江の集團では、車に「乾尸を載せて以つて糧と爲」していたし、京東で蜂起した史康民の集團でも、メンバーが多くなり、糧食が乏しくなつたので、人を殺して食ひ、「餓殍」と號していたといふ。また、張榮集團でも、通州に駐屯していた時、糧食が盡きたので、住民を捕まえ、「其の首を斷ち、其の

兩臂・兩脛を斫り、鹽づけや干物として、食糧に充て、住民で助かった者はほとんどなかったという。この種の例も、牧擧に遑がない程である。これらの集團では、食人肉の行爲が、混亂期の食糧缺乏の補給として行なわれているが、うちづく食糧不足の中で、次第に、食人肉が習慣化する傾向にあったようである。例えば、山東の范溫は、「忠義人」を率いて、海路、行在所に赴き、南宋に「歸正」したが、范溫集團では、行在所に至っても、依然として食人肉の習慣を維持してやめなかったという。このようにして、食人肉は武裝集團の習慣として定着し、その独自の習俗の一つとなったのである。

その外、綽名なども、南北宋交替期の武裝集團の特色の一つに擧げることが出来る。中國において、民衆がお互いに綽名で呼び合う風習が、いつ頃から始まったかは、寡聞にして知らない。しかし、南北宋交替期が、中國綽名史上における劃期であることは間違いないところであろう。「李鐵槍」「張奔蕩」「潑李三」「丁一箭」等々、武裝集團の指導者たちの大半が、自稱他稱の綽名をもつに至っているのである。

以上、「紅巾」「義兄弟」の外、「入墨」「食人肉」「綽名」など、南北宋交替期の武裝集團に見られる諸特色を、煩を厭わず列擧した。これらは、必ずしも、南北宋交替期に始まったものばかりではないが、この時期に、後世の武裝集團に見られるものは、ほとんど出揃ったのである。それ故に、この時期は、中國の民間武裝集團の大成期と言っても過言ではあるまい。

### 三 「紅巾」の展開

#### (1) 「紅巾」と『水滸傳』

前章でみたように、南北宋交替期の驚天動地の江北で、中國の民間武裝集團の原型は、ほぼ完成したといえるが、その民間武裝集團の世界が最もリアルに描かれているのは、小説の『水滸傳』である。そこで、次に、『水滸傳』とこれら南

北宋交替期の武裝集團との關係を、「紅巾」を中心に、みてみることにする。

『水滸傳』のストーリーの骨格は、宣和元年から三年にかけて、山東を中心にして起った「宋江の亂」によって組み立てられている。しかし、この「宋江の亂」については、詳しいことは全くわからない。ただ、南北宋交替期まで、その「亂」の影響が残っていたらしく、建炎元年の七月に、「宋江の黨」という史斌が、皇帝と自稱し、陝西の興州を根據に蜂起している。この史斌は、「叛賊」とされているから、一旦、宋朝に投降し、興州に派遣されていたものであろう。當時の陝西では、金軍が迫り、大混亂に陥っていた。史斌は、その混亂の最中に蜂起したが、陝西地方の自衛集團と關係が深かったらしい。というのは、建炎二年四月、金軍が一時退兵した際に、金軍の占領下の長安を「收復」した「義軍」の「統領」張宗諤に誘われて、長安に入り、ここを本據としているからである。この史斌は、『水滸傳』の英雄「九紋龍」史進と、音も似ているし、また、史進の家も史斌が活躍した同じ陝西にあり、史進のモデルになったのではないかといわれている。

その外、余嘉錫は、『宋江三十六人考實』の中で、『水滸傳』の英雄と姓名の似ている者を、南北宋交替期の史料から丹念に拾っている。姓名が似ていても、同一人かどうかは確定出来ないが、『水滸傳』の英雄と同じような人物が、南北宋交替期に多數見られるのは事實である。それ故に、『水滸傳』は、「宋江の亂」の史實を骨組に使っているが、英雄たちの具體的なモデルは、南北宋交替期の江北の諸武裝集團にあるのではないかと思われるのである。例えば、そのような痕跡の一つとして、現存の『水滸傳』の中には、梁山泊やその外の山寨の英雄好漢たちが、「紅巾」を戴き、「紅襖」を着、「紅幟」を掲げる例がかなり多い事などを擧げることが出来る。これらの「紅巾」「紅襖」は、『元曲選』中の水滸傳劇にもみられる。勿論、『元曲選』は明代の編纂で、元代のままではないが、元代の水滸傳劇にこれらがみえていたことは確かであろう。

また、『水滸傳』についての最古の記述と言われる南宋末・元初の人鑿開の「宋江三十六人贊并序」（周密『癸辛雜識』

續集上、所收)には、これらの「紅巾」や「紅襖」は見えないが、「船火兒張横」の贊に「大行の好漢、三十有六。此の火兒無くんば、其の數足らず」とか、「浪子燕青」の贊に「平康の巷陌、豈汝の名を知らんや。大行の春色、一丈青有り」などであるように、宋江らの根據地が梁山泊ではなく、太行山にあるとされているのは、注目に値いしよう。というのは、太行山は、前述したように、「八字軍」や「紅巾」などの、抗金ゲリラの有力な根據地であったからである。そして、また、『水滸傳』の英雄の中には、前掲の「船火兒張横」のように、

靖康より以來、中原の民の金に従はざる者は、太行山に相保聚す。初め、太原の張横なる者、衆二萬を有し、嵐・憲の境を往來す。嵐・憲の知州同知、兵一千五百人を領して、山に入りて之を捕へんとするも、横のために敗られ、兩同知、俱に執へらる。(『中興小紀』卷一九、紹興五年末條)

などと、太行山を根據地に、金に對してゲリラ鬭争を展開していた實在の人物もいたのである。それ故に、南宋末頃の『水滸傳』(これを假りに「原水滸傳」と呼んでおこう)の主人公達のモデルは、これら「紅巾」を戴き、「紅襖」を着たりして、太行山等を根據地に、金軍と戦った南北宋交替期の武裝集團及びそのリーダー達であったと考えられるのである。そのことは、『水滸傳』との關係はわからないが、前述の「紅巾」邵青の「衆を聚めてより已後の蹤跡并びに其の徒黨」を題材にした詳しい「小説」などが實際に作られていることによっても窺えよう。そして、これらの「小説」は、最初は講師たちによって、それぞれ單獨で語られていたと思われるが、次第に統合され、南宋末には一つの大河小説としてまとめられるようになり、「原水滸傳」が出現したものと考えられる。

そして、この「原水滸傳」は、南北宋交替期の武裝集團がモデルであったから、かなり、民族主義的な色彩が濃厚であったと思われる。しかしながら、現存の『水滸傳』や「元曲」では、これら民族主義的な色彩が極めて希薄で、先述したように、「紅巾」「紅襖」等といった文字に、僅かにその痕跡をとどめているにすぎないのである。それは何故であらうか。私は、その原因は元朝という異民族王朝の支配體制にあると思う。というのは、あからさまに民族的抵抗を讚美する

ことは、南宋治下では許されても、異民族王朝である元朝支配下では許されるわけではないからである。それ故に、元朝治下では、表面上は、民族主義的な色彩は希薄とならざるを得なかったのである。しかし、當然、秘密裏には、民族的な抵抗を鼓舞するものが作られ、演ぜられていたと思われるが、現在の我々には、それを知るすべはない。

それはともかく、元代になって、民族的な面では後退せざるを得なくなり、宋江らの主要舞臺も、反金レジスタンスのメッカとも言うべき太行山から、梁山泊へと變更されるようになったようである。それは、梁山泊も、張榮などの南北宋交替期の武装集團の根據地として有名であったが、太行山ほど民族色が強くなかったからであろう。元代の成書と考えられる『宣和遺事』の「晁蓋ら八人は、……やむなく、楊志らを誘って、總勢二十人で義兄弟となり、太行山の梁山泊に行つて、落草して、寇となりました。」（元集）という記事などは、丁度、この太行山から梁山泊へと舞臺が變更される過渡期の状態を示していると考えられる。そして、このように、次第に脱民族主義化が進みながら、元末を迎えるのである。

元末の「大反亂」期に、『水滸傳』は施耐菴や羅貫中らの手によって、集大成されたものと言われているが、現存の版本は明も後半のもので、元末を距ること久しい。また、彼ら自身についても、ほとんど不明である。しかし、現存版本によっても、彼らが大きくどの方向へ、「原水滸傳」の向きを變えたかは、窺うことが出来るように思われる。すなわち、「原水滸傳」が形成される背景には、そのモデルになった南北宋交替期の武装集團の鬭いに對する共感と期待が存在したと思われるが、現存の『水滸傳』は、全體としては、その反對方向に向けられているのである。この點、「元末の反亂」の際、施耐菴は「反亂」の指導者の一人張士誠から招聘されたが、赴かなかつたという傳説は、彼の階級的立場を暗示していて興味深い。結局、彼らは、「元末の大反亂期」に、沸き起る民衆の反モンゴル・反地主の鬭いを目のあたりにして、「原水滸傳」を投降路線へと軌道修正して、民衆のエネルギーの封殺をはかつたのであろう。

しかし、もともとの南北宋交替期の武装集團のもつ素材の質は争えず、『水滸傳』は完成するやいなや、編者の意圖を越えて、獨り歩きを始め、「民衆反亂」のバイブルとなるに至るのである。そしてこのように獨り歩きを始めた『水滸傳』

に對して、明末や清後半の「民衆反亂」の昂揚期には、『水滸傳』の軌道を再び修正して、昂揚する民衆のエネルギーの鎮靜をはかるうとした金聖嘆や俞萬春のような者まで出現してくるのである。<sup>108</sup>

## (2) 元末の「紅巾」

元代の前半には、「紅巾」は全く表面には現われてこない。しかし、祕密裏には活動を續けていたらしく、元末になると一齊に蜂起して、元朝打倒の鬭いを展開するのである。

これら、元末に「紅巾」を掲げて蜂起した集團の主なものとしては、(a)韓林兒・劉福通集團、(b)芝麻李集團、(c)郭子興集團、(d)朱元璋集團、(e)徐壽輝集團、(f)明玉珍集團、(g)陳友諒集團、(h)孟海馬・布王三集團、などが擧げられよう。この外、元末に蜂起した集團で有力なものは、方國珍や張士誠の集團があるが、これらは、「紅巾」を掲げなかったといわれている。<sup>109</sup>しかし、張士誠軍が、「紅軍」と呼ばれている例もあるから、張士誠集團でも、「紅巾」を掲げていた可能性はある。それはともかく、これら「紅巾」を掲げた諸集團を、(a)から(d)までと、(e)から(h)までの二つに分類するのが、重松以來、一般的となっている。重松は前者を「白蓮敎系」、後者を「彌勒敎系」と呼んだが、近年は前者を「東系紅巾軍」、後者を「西系紅巾軍」と呼ぶ呼び方が定着しつつあるようである。これら二系統内の諸集團相互には緩やかな連帶があったようであるが、二系列間の關係は全くわからない。多分、南北宋交替期の「紅巾」集團のように、それぞれ獨自に蜂起し、相互の關係はほとんどなかったのではないかと思われる。以下、個々の集團について、大まかにみておこう。

「東系紅巾」では、(a)「韓林兒・劉福通集團」が最も有力であるから、まず、これからみることにする。至正十一年五月、白蓮敎の敎主韓山童は、「天下大亂し、彌勒佛下生す」というスローガンの下に、「紅巾」を掲げて蜂起を計畫したが、發覺して處刑された。難を逃れた門弟の劉福通・杜遵道らは、潁州に入って蜂起して、またたくまに、軍勢十餘萬という一大勢力に成長したという。その後、至正十五年に、劉らは山中に隠れていた敎主の子の韓林兒を搜し出し、これを



皇帝に擁して、亳州で即位させ、國號を「宋」、年號を「龍鳳」と定めた。これが、この集團の形成過程のあらましである。從來、この集團は白蓮教を中心に組織されたものと考えられてきたが、鈴木中正はこれに對して、新しい見解を出している。彼によれば、この集團は、韓家を中心とする宗教派と、劉福通らが率いる武力派との「共同戦線」により形成されたものという。たしかに、劉らは、蜂起の際に、「白馬黒牛を殺し、天地に誓告」したり、その集團では食人肉の習慣があるなど、武裝集團固有の性格をもっており、この鈴木説には、私も賛成である。私は、さらにもう一步進めて、武裝集團と「紅巾」との本来の關係からして、この韓林兒・劉福通集團の掲げる「紅巾」も、劉らの武裝集團によつてもたらされたものではないかと考えている。つまり、私は、元代になつても、「紅巾」の傳統は、地下の武裝集團内では繼承され、異民族王朝たる元朝に對する民族的抵抗のシンボルとされておき、それが元末の「大反亂期」になつて、一齊に掲げられたと考えているのである。それは、劉らが蜂起した際に、「韓山童は徽宗の八世の孫なり、當に中國に主たるべし」と「詐稱」したり、國號を「宋」と定めたり、彼らが「紅巾」のルーツが南北宋交替期にあることを忘れていなかったことによつても、窺えよう。また、この韓林兒・劉福通集團が、これら「紅巾」のルーツをいちはやく獨占したことが、他の「紅巾」集團に對して優位に立ち得た原因ではないかと思われる。

次に、(b)「芝麻李集團」についてみてみよう。至正十一年八月、江蘇の邳州の人「芝麻李」は劉福通らの舉兵を聞いて、鄰人の「社長」趙均用や「勇悍にして膽略ある」彭大ら「八人を得て、歃血同盟」して、「紅巾」を掲げて蜂起し、徐州に侵入して、ここを根據とした。以上が、この集團の蜂起の概略である。リーダーの芝麻李は、本名を李二といったが、「饑歲」に倉の芝麻を、「盡く人に賑した」ので、この綽名が附けられたかというから、「義俠心」を以つて任俠の徒などの間では人氣があつたのであろう。蜂起の際、仲間入りを勧められた彭大が、最初にこの芝麻李の參加の有無を確かめているほどである。また、「歃血同盟」している點などからも、この集團は、芝麻李を中心とした任俠的な結合による武裝集團と言えよう。それ故に、「紅巾」なども、これら武裝集團の傳統に基づくものと考えられる。それはともかく、舉

兵後しばらくして、元軍の攻撃を受け、芝麻李は處刑され、趙均用・彭大らは、濠州の郭子興の下に逃れ、この集團は崩壊した。趙はその後、韓林兒・劉福通集團の一支派である山東の毛貴集團に赴いているので、これら集團間には、一種の連帶感が存在していたことが知られよう。しかし、あまりシックリしていないので、この連帶はそれほど緊密なものではなく、武裝集團同志の緩やかな連帶感といった性格のものではなかったかと思われるのである。

次に、(c)郭子興集團についてみてみよう。この集團も、『明史』卷一二二郭子興傳に、「郭子興、……長ずるに及んで、任俠にして、賓客を喜ぶ。たまたま、元政亂る。子興、家資を散じ、椎牛酾酒して、壯士と結納す。至正十二年春、少年數千人を集め、襲いて濠州に據る。」とあるように、郭子興を中心とした任俠的結合による武裝集團と言えよう。野口鐵郎は、この集團を、「郷曲の保全を目的として結成された」「武裝地主連合集團」と主張しているが、疑問である。野口は、『明實錄』や『國權』などに、郭子興が「豪傑子弟」を率いて蜂起したとあるのを根據に、「集團の中核的部分が土豪あるいはそれに類する、ないしそれに依存する階層」であったとする。しかし、この「豪傑子弟」は「任俠的な若い衆」という意味であって、野口のように、即、「土豪」や「地主」の「子弟」とはし難いと思う。それは、この「豪傑子弟」が、『名山藏』では「賓客子弟」、『明史』では「少年」となっていることから窺えよう。また、この郭子興軍も、「絳衣」を着ていたというが、これなども、武裝集團の「紅巾」の傳統に基づくものである。

次に、(d)朱元璋集團についてみてみよう。朱元璋は、もともと、郭子興の部下であったから、彼の集團も、「紅巾」を掲げていたと思われるが、獨立後、彼の權力形成史上の節目に、二度も、「紅巾」についての規定を設けているのは興味深い。一度目は、至正十五年六月、太平を陥し、ここに太平興國翼元帥府を開設した時で、「旗幟及び將士の戰衣は、皆赤を尙ぶ」と規定している。そして、二度目は、至正二十四年正月、吳王の位に即いた際で、「將士の戰襖・戰裙・壯帽・旗幟は、皆紅色を用ゆ」と規定したのである。このような劃期に、わざわざ確認するかのようには、「紅巾」について規定したのは何故であろうか。私は、朱元璋が、各地の武裝集團における「紅巾」の傳統のもつ重さを知悉しており、「紅巾」

を媒介に、それらの武裝集團を自己の勢力下に吸収しようとしたのではないかと思う。

東系紅巾はこれくらいにして、次に、西系紅巾の中心である(9)徐壽輝集團についてみてみよう。至正四年に、「彌勒佛」を奉じて蜂起した袁州の「妖僧」彭瑩玉は、至正十一年、また、弟子の鄒普勝・徐壽輝らと、湖北の蘄州で「紅巾」を掲げて蜂起し、徐を皇帝の位に即け、國號を「天完」と號した。この集團は彌勒信仰を奉じていたので、重松俊章は、この西系紅巾を「彌勒教系」と名づけ、東系の「白蓮教系」と對比している。これに對して、近年、鈴木中正は、韓林兒集團よりも、この徐壽輝集團の方を、白蓮宗の祖たる茅子元の法流に屬する「白蓮教系」とすべきであるという新説を發表した。<sup>64)</sup>この新説は、なかなか興味深く、私もかつて賛成したことがあるが、よく考えてみると、疑問が多く、従い難いように思う。第一、韓林兒集團では、「白蓮教會を以つて、云々」と明記されているにもかかわらず、この徐壽輝集團には、どこにも「白蓮教」と書かれていないのである。これまで、「紅巾」||「白蓮教」というイメージが強く、「紅巾」と書いてあれば、知らず知らずの内に、「白蓮教」としがちであつたようである。しかし、前述したように、「紅巾」と「白蓮教」とは、はっきり區別すべきであると思う。徐壽輝集團が「白蓮教」を奉じたという鈴木説のポイントは、徐集團では「普」の字の附く名前の者が多いが、これは南宋の「白蓮宗」で、「普・覺・妙・道」の四字を尊んだからである、という點であろう。この點は、なかなか面白いが、「普」の附く名前は、佛教關係者によく使われる名で、茅子元の法系の事實とはいえない。例えば、前掲の「紅巾」を掲げた長蘆の崇福禪院の行者達は、普倫・普連・普斌という名前である。それ故、鈴木流の論證方法によれば、茅子元の立教前のこれらの行者達も「白蓮教徒」になつてしまふであろう。また、同じ集團内で、ある共通の文字を使う習慣は、佛教集團だけではなく、南北宋交替期の武裝集團などでも見られ、これも「白蓮教」獨特の習慣とは言えないのである。この徐集團は、やはり、重松のように、「彌勒教系」とすべきであろう。また、この集團内にも、「膂力人に過ぎ、武藝に優れた」陳友諒や二刀流の使い手「雙刀趙」の趙普勝などの「武力派」も參加しており、鈴木の言うように「宗教派」だけの集團とは言えない。そして、この集團内の「紅巾」は、彼ら「武力

派」によってもたらされたものであろう。

(f) 明玉珍集團や(g) 陳友諒集團は、この徐集團から分立したものであるから、その「紅巾」も、徐集團からもたらされたものであろう。また、(h) 孟海馬・布王三集團も同様と思われるが、これらについては史料がなく、詳しいことは全くわからない。

### (3) 明清の「紅巾」

前節でみたように、元末の「反亂軍」も、モンゴルに對する民族的な鬭いのシンボルとして、「紅巾」を掲げ、朱元璋集團などでは、權力形成の重要な節目毎に、「紅巾」の規定を再確認し、これを誇示しているほどである。そして、このような「紅巾」に對する意識は、明の天下統一後もしばらく續いたらしく、洪武二十一年にも、「中外の衛所の馬歩軍士の服色を定む。ただ駕前旗手の一衛のみ黃旗を用ひ、軍士・力士は俱に紅胖襖とし、盔甲の制は舊の如くす。其餘の衛所は、悉く、紅旗・紅胖襖とす」と規定されている。しかし、民間の武裝集團では、依然として、「紅巾」を掲げていたようであるし、モンゴルに對する緊張も緩んでくると、「紅巾」は民族鬭争よりも、「反亂」のシンボルとしてのイメージが強くなり、明朝側でも、次第にこれを忌避するようになったらしい。そして、「朱元璋軍」を「紅兵」等と書いた箇所などは、書き改められるようになったようである。

以下、明代の「紅巾」について、若干、みてみよう。明中期にも、「紅巾」を掲げた民間武裝集團はかなり存在していたと思われるが、私は寡聞にして、前掲註⑨の正徳年間の「劉六・劉七の亂」の際の「衣幟皆赤い」「山西の盜李華」位しか知らない。

明末の「反亂」期になると、「紅巾」の活動も表面化してきたらしい。例えば、明末の天啓二年に山東を中心に、白蓮教の一派の聞香教の信徒たちが起した「徐鴻儒の亂」などの際にも、「紅巾」が掲げられている。この聞香教は、于弘志

に率いられた「棒捶會」という武術團體と同盟關係にあり、この「棒捶會」でも「紅巾」を掲げているから、多分、この「棒捶會」を通じて、「紅巾」がもち込まれたのであろう。また、この「反亂」の指導者「徐鴻儒」は「梁山泊の演義故事を誤信す<sup>89</sup>」と言われているように、『水滸傳』のファンであつたらしい點は興味深い。

その外、崇禎十三年には、頭に「紅巾」を戴き、身に「紅衣」をまとい、「替天行道」などという、『水滸傳』のスローガンを書いた「紅旗」を押し立てた「土寇」が河南の濬縣附近で活動している<sup>90</sup>。このように、同じく南北宋交替期の反金武装集團にルーツをもつ、「紅巾」と『水滸傳』が、民間の武装集團の傳統を支える二大支柱とでも言うべき存在となつているのは注目に値いしよう。

次に、清代の「紅巾」についてみてみよう。清初の混亂期には、中國全土にわたつて武装集團が結成されたが、湖南の南部の桂陽を中心に、「頭に紅巾を裹<sup>ま</sup>つた」「紅頭の賊」と呼ばれる集團が、順治五年から十一年にかけて活躍している。この「紅頭の賊」の「紅巾」には、滿洲民族に對する民族的抵抗の意味があるのかもしれないが、詳しいことはわからない。清前期に、明らかに民族的抵抗のシンボルとして「紅巾」を掲げたものとしては、康熙四十六年頃、「紅巾を頭に裹<sup>ま</sup>ひ、『大明』の旗號を豎<sup>た</sup>て、太倉附近で活動していた「強賊<sup>89</sup>」がある。この集團は、同じ頃、明裔の「朱三太子」を奉ずると稱して、浙江の四明山で蜂起した張一念和尚の集團と關係があつたというから、その民族色も相當強烈であつたと言えよう。また、乾隆三十三年には、湖北の荊門州で、拳棒の習鍊團體を基盤に、孫大有・何佩玉らが、「紅巾を以て頭を包み」、「大明朱天子天令號」とか「中華明君見漢不殺」などといった旗を掲げて蜂起している<sup>90</sup>。

前述のように、元末の「紅巾」集團では、そのルーツが南北宋交替期にあることが記憶されていたらしいが、清代の「紅巾」集團では、既にそのルーツは忘れられていたようで、明末の崇禎帝の遺兒朱三太子等が奉じられているのである。これは、明の太祖朱元璋が元末に「紅巾」を掲げていたので、一般には、明朝は火徳で、その色は「赤」と考えられていたからであらう<sup>91</sup>。しかし、實際には、王朝が五行のいずれに屬するかを制定する習慣は、宋・金で途絶え、元以降は

行なわれなかったようである。

それはともかく、「紅巾」は、清代では「反清復明」の民族的抵抗のシンボルとして、「會黨」などによって掲げられることになるのである。例えば、清一代を通じて最大の反清勢力であった「天地會」などでも、「紅巾」を掲げていたらしく、嘉慶七年、廣東の博羅で、陳爛屐四らによって起された蜂起軍も、「紅布を以って頭を包んで」いた。また、道光二十八年末頃から二十九年末の間、張家祥らによって率いられ廣西各地に活動していた蜂起軍も、「紅布を用って頭を裹み」「替天行道、反清復明」という旗を掲げていたし、道光二十九年から三十年にかけて、湖南の新寧を中心に活躍していた、李沅發に率いられた蜂起軍も、「劫富濟貧」という旗を掲げ、「頭を紅巾で裹」んでいたのである。そして、道光三十年、太平天国軍が廣西の金田村で蜂起すると、「天地會」軍も、これに呼應しながら、廣西・廣東・福建・湖南・浙江・貴州等、各地に蜂起するに至るのである。これらの蜂起軍は、いずれも「紅巾」を被っていたので、「紅巾の賊」「紅頭の賊」等と呼ばれている。中でも、勢力のあったのは、咸豐四年に陳開らに率いられて廣東の佛山を中心に蜂起した「紅頭」軍と、咸豐三年劉麗川らに率いられて上海に蜂起した「小刀會」軍であろう。兩者とも、「首に紅巾を裹ひて識と爲し」たり、「頭に紅巾を裹い、腰に紅布を纏」って蜂起し、前者は「洪徳を大成する」(明朝を復興する)という意味の「大成國」、後者は「大明國」(後に「大明太平天国」と改稱)という政權を樹立している。特に、前者のメンバーの中には、リーダーの陳開をはじめ、アヘン戦争の際の所謂「三元里抗英鬪争」に参加した人々が、かなり多かったらしい事は興味深い。多分、この「紅頭」軍は、アヘン戦争を體驗した廣東の人々の民族的危機意識の中から結成されたものであろう。また、浙江の樂清縣を中心に、咸豐四年頃、瞿振漢に率いられて蜂起した集團も、「紅巾」を被っていたので「紅寇」等と呼ばれているが、これも「粵艇」と關係があったというから、上海や廈門の「小刀會」と同様、廣東の「天地會」の支派ではないかと思う。今、これらの一々について、詳述する餘裕を持たないが、共通する特色を一つだけ挙げておこう。それは、これら各地の「紅巾」は、緩やかな連繫はあるにしても、小黨がそれぞれ分立しており、各地域ごとでさえ、ほと

んど統一がなされていないという点である。これは、ゲリラ部隊として出發した南北宋交替期以來の「紅巾」の特色で、長所でもあり、短所でもあると言えよう。というのは、このような體制は、巨大な權力に對してゲリラ的に鬭う時は有利であるが、一旦、自己の權力を樹立した場合、散漫でまとまりがなく、極めて不利であるからである。

以上のように、「太平天国の亂」前後には、廣東を中心に、江南の各地に「天地會」系の「紅巾」を掲げた武装集團が出現していたが、「太平天国」軍も、「紅巾の賊」と呼ばれており、「紅巾」を掲げていたのである。洪秀全自身も、廣西の紫荆山區で、「社稷・文昌祠の神像を毀つ」際などには、「紅巾を裹まと」つていたという。そうすると、「拜上帝會」は、「天地會」の一支派として出發したことになる。ちなみに、洪秀全の堂兄の邨王洪仁政の供述書に、「向むかし、在家で看牛こまようしばんをしていたころ、兄弟の契り（拜兄弟）をしたため、房屋いえを宋姓に焼かれた」とあり、この「拜兄弟」とは、「會黨」に入會することであろうから、洪一族は、最初、「天地會」に入會していた可能性は十分あると思われる。戦後、日本の學界では、「太平天国」に對する「會黨」の役割りを過少評價する嫌いがあるが、こういう點も含めて、再検討する必要があるようである。

それはともかく、外にも、清末には、「捻軍の亂」や「義和團の亂」「辛亥革命」の際などの蜂起軍中にも、「紅衣」「紅巾」「紅旗」などが散見するが、長くなるので、今は省略する。

#### 四 おわりに

以上、南北宋交替期から、清末までの「紅巾」について、大まかに、みてきた。これによっても、いかに連綿と、その傳統が続いてきたか窺えるであろう。そして、このような傳統は、近現代においても繼承されているように思われるのである。それ故に、最後に近現代の「紅巾」を若干みて、まとめに代えよう。

中國近代の民間武装集團としては、華北の農村を中心に、一九二〇～三〇年代に組織された「紅槍會」などは、その代

表的なものといえよう。この「紅槍會」の諸派でも、「紅巾」を掲げていたものが多かったらしく、河南の「紅槍會」の入會式の際などには、「赤布三尺で頭を包み、衆に向つて誓書一通を出」す儀式が見えているし、江蘇の「大刀會」でも、「奉天行道」の旗を幟て、赤布を臂に纏ふて居た<sup>111</sup>という。また、四川の「神兵」なども、「頭を赤布で包み、赤帶をし、左肩上に赤布を附け、上に隊號を墨書」していた<sup>112</sup>という。そして、これらの「紅槍會」諸派の中には、「農民赤衛隊」や「紅軍游擊隊」等へと吸収・編成されるものも出て來<sup>113</sup>、「紅巾」に象徴される民間武裝の傳統は、「紅軍」にも繼承されることになるのである。それは、例えば、

街のいたるところは、われわれの荷役、外國企業従業員、海員、印刷、自動車、調味料、燃料など各業種の労働者で組織された赤衛隊であつた。暴動に参加した人は、いづれも首に赤いスカーフ「紅領帶」を巻くか、腕に赤い腕章「紅袖標」をつけていたので、市民はわれわれを「赤い仲間」「紅帶友」と呼んでいた。(何潮「廣州蜂起の思い出」<sup>113</sup>)

とか、または、

土豪を打倒したのち、われわれは沒收品を利用して、かれの家に設けられた鍛冶の爐で、大刀と槍を作つた。赤い布「紅布」と赤い毛がきらめく大刀と槍につけられ、戰士たちは十分な威風を整えた。われわれはさらに赤い腕章「紅臂章」も作り、それに小さい字で「宜春」、大きい字で「赤色游擊隊」と書いた。このときから、われわれはどこに行つても、少なからぬ民衆といっしょであり、民衆は喜びと親しみのまなざしでわれわれを歓迎してくれた。(張興華「ある赤色游擊隊の成長」<sup>114</sup>)

などと、「紅軍」内部で、「赤いスカーフ」や「赤い腕章」などが、頻りに見られることによつても窺える。勿論、これらは、ソビエト赤軍からの輸入であろうが、一般兵士や民衆たちには、外來のものというより、むしろ傳統的な「紅巾」のバリエーションと認識されていたと考えられよう。それ故に、民衆から、「喜びと親しみのまなざし」で迎えられたのである。



また、「抗日戦争時期」には、「紅槍會」は「八路軍と協力またはそれに改編され」、「抗日」のために「勇敢に戦った」というから、「紅巾」に象徴された南北宋交替期以来の民族的抵抗の傳統も、「革命」軍に繼承され、發展させられたと言えよう。

## 註

(1) 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、一九七四）頁二二。

(2) 堀田善衛『海鳴りの底から』（朝日新聞社、一九六一。後に新潮文庫收録）プロムナード五、「武器感覚について」、参照。

(3) 「宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・白蓮教に就いて」（『史淵』二四 一九四〇）。

(4) 黄現璠「南宋初年河北山東之義軍」（『文化建設』二一五 一九三六）、黄・陶希聖「北宋亡後北方的義軍」（『食貨』三一五 一九三六）、翦伯贊「南宋初年黃河南北義軍考」（『中國史論集』一九四三）、趙儼生「靖康・建炎間各種民間武裝勢力性質的分析」（『文史哲』一九五六一）、賴家度・李光壁「北方忠義軍和岳飛北伐」（『歷史教學』三九 一九五四。後に『中國歷史人物論集』に收録）等。

(5) 重松前掲論文頁九〇。

(6) 王昶『金石萃編』卷一五〇、『江蘇金石志』金石二二、徐夢莘『三朝北盟會編』（以下『會編』と略稱）卷二一七、紹興二十一年八月四日條等所收。

(7) 李璽『皇宋十朝綱要』卷一八。

(8) 『會編』二六、王偁『東都事略』卷一一、『宋史』卷三三。

なお、張大昌『續資治通鑑長編拾補』卷五二は「正月丁卯朔」とする。

(9) この記事のやや省略されたものが、李心傳『建炎以來繫年要錄』（以下、『要錄』と略稱）卷九、同年九月壬辰條に見えるが、多少文字の異同がある。引用文中の「」を附したところは、『要錄』によって改めたもの。

(10) 『要錄』卷一三四、紹興十年正月・是月條。

(11) 胡聘之『山右石刻叢編』卷一九、金、「襄垣縣修城記」。

(12) 『要錄』卷四七、紹興元年九月・是秋條、宇文懋昭『大金國志』卷七、天會九年條。

(13) 『宋史』卷四四九、魏行可傳。

(14) 『中興禦侮錄』卷下、紹興三十二年六月十五日條。

(15) 『會編』卷二三八、建炎四年四月二十五日條。

(16) 『要錄』卷二一、建炎三年三月庚寅條。

(17) 『會編』卷二二一、紹興二十五年十一月條所引（『洪皓』行狀）。

(18) 『要錄』卷一五八、紹興十八年十月辛未條。

(19) 『要錄』卷四〇、建炎・是歲條。

(20) 『宋會要輯稿』兵一一二五。

- (21) これらの武裝集團については、趙儼生前掲論文、参照。
- (22) 『會編』卷一三五、建炎三年三月二十六日條、『要錄』卷三〇、建炎三年十二月・是月條。『會編』がやや詳しい。
- (23) 民衆鬭争における演劇の非日常化の機能については、拙稿「清代に於ける演劇と民衆運動」(『木村正雄先生退官記念東洋史論集』、木村先生退官記念會、一九七六) 参照。
- (24) 狩野直喜「五行の排列と五帝徳に就いて」正・續・補遺四則(『讀書叢餘』、弘文堂、一九四七) 参照。
- (25) 志田不動庵「赤眉の賊と漢城陽景王祠との關係」(『歴史教育』五一六、一九三〇) 参照。
- (26) 『要錄』卷四三、紹興元年四月丁亥條。
- (27) 『會編』卷一〇一、建炎元年五月一日條所引『中興日曆』。
- (28) 「紅襖の賊」については、趙儼生「南宋金元之際山東淮海地區的紅襖忠義軍」(『文史哲』一九五四—四、後)、中國農民戰爭史論文集に收録) 等、参照。
- (29) 『會編』卷二〇四、紹興十年十月十五日條。
- (30) 『會編』卷一二七、建炎三年三月條。
- (31) 『會編』卷二〇〇、紹興十年三月十八日條。
- (32) 周密『齊東野語』卷九、李全條。
- (33) 『會編』卷一一八、建炎二年十月五日條。
- (34) 古代の任俠については、増淵龍夫「漢代における民間秩序の構造と任俠的習俗」(『中國古代の社會と國家』、弘文堂、一九六〇) 参照。
- (35) 李攸『宋朝事實』卷九、勳臣條。那波利貞「唐代の社邑に就きて」(『唐代社會文化史研究』、創文社、一九七四) 頁五一、
- 等参照。
- (36) 『皮子文藪』、「鄧孝議」上下。
- (37) 栗原益男「唐五代の假父子的結合の性格」(『史學雜誌』六二一六、一九五三) 参照。
- (38) 「社邑」については、那波前掲論文参照。
- (39) これらについては、詳述すべきであるが、今はその餘裕がない。さしあたり、草野靖「宋代の主戸・客戸・佃戸」(『東洋學報』四六—二、一九六三) 頁八六、等が示唆に富む。
- (40) 『宋史』卷四四八。
- (41) 『要錄』卷一九、建炎三年正月乙未條、『會編』卷二二〇、同年正月一六日條。
- (42) 『會編』卷一四二、建炎四年九月二十七日條、『要錄』卷三七、同年九月・是月條。
- (43) 『會編』卷一〇四、建炎元年五月二十一日條。
- (44) 羅爾綱『天地會文獻錄』(上海正中書局、一九三六) 頁二一・三二・四三・七一等、参照。
- (45) 『會編』卷一一八、建炎二年十月五日條所引『時政記』。
- (46) 權力がいかに民衆の武裝を恐れているかという例としては、次の一例を擧げるだけで充分であらう。金軍が開封を陥落した後、欽宗は城外の金の大元帥粘罕の營舎に赴き、戻らなかつた。そのため、城内では、武器を製造して緩急に備えようと主張する者も出現したが、開封府では、この期に及んでもまだ、「事を生ずるを慮んばかり」許可せず、主謀者の李寶以下十七人を處刑したのである。(『會編』卷七七、靖康二年正月二十二日條)

- (47) 『會編』卷一三八、建炎四年四月二十四日條所引「遺史」。
- (48) 「淨明忠孝道」の「忠」については、秋月観映「道藏本功過格と淨明道―酒井・吉岡兩博士の争點によせて―」(『文經論叢』六一四、一九七二)頁一四一六、二二、参照。
- (49) 『宋史』卷四〇三、張威傳、卷四〇二、安丙傳。
- (50) 『宋史』卷四一、理宗本紀。
- (51) 『宋史』卷四七六、李全傳。
- (52) 『會編』卷一四七、紹興元年五月十三日條。
- (53) 『會編』卷一一三、建炎元年十月二十九日條。
- (54) 『要錄』卷一〇、建炎元年十一月・是月條。
- (55) 『要錄』卷一九、建炎三年正月丁亥條。
- (56) 宋代の入墨の風習全般については、曾我部靜雄「宋代軍隊の入墨について」(『東洋學報』二四一三、一九三七。後に『支那政治習俗論攷』に收録)が詳しい。
- (57) 中國歴代の食人肉の風習については、桑原隲藏「支那人間に於ける食人肉の風習」(『東洋學報』二四一一、一九二四)参照。
- (58) 『要錄』卷二二、建炎三年三月丁未條。
- (59) 『會編』卷一三八、建炎四年五月十三日條。
- (60) 『會編』卷一四四、紹興元年二月十五日條。
- (61) 莊季裕『鷄肋編』卷中。
- (62) 『要錄』卷七、建炎元年七月・是月條。
- (63) 『要錄』卷一一、建炎元年十二月甲戌條。
- (64) 余嘉錫『宋江三十六人考實』(『余嘉錫論學雜著』下、中華書局、一九六三)頁三六八。
- (65) 『會編』卷一一六、建炎二年四月條。余前掲書頁三六九、嚴
- 敦易『水滸傳的演變』(作家出版社、一九五七)頁二〇、参照。
- (66) 余嘉錫前掲書頁三六八、嚴敦易前掲書頁二〇―二一。
- (67) 梁山泊の「紅巾」の例としては、「每隻船上只有五個人。四個人搖着雙櫓、船頭上立着一個人、頭帶絳紅巾、都一樣身穿紅羅襖」(二十回)とか、「梁山泊好漢……人々都帶茜紅巾、個々齊穿緋襖襖。……滿地紅旗飄火焰、半空赤幟輝霞光」(六十三回)など。また、梁山泊以外のものとしては、少華山寨の陳達のように、「乾紅の凹面巾」を被り、「紅襖」を着たり(二回)、桃華山寨の連中のように、「頭巾都戴茜根紅、衲襖盡披楓葉赤」(五回)等といった例もある。引用は、鄭振鐸校訂『水滸全傳』(中華書局、一九五八)による。
- (68) 「俺這石榴色茜紅巾」(『燕青博魚』四折)、「袒下我這紅衲襖」(『李逵貞荆』四折)、「繡襖襖千重花艷、茜紅巾萬縷霞生」(『爭報恩』楔子)、「你這般茜紅巾、腥衲襖、乾紅搭膊」(『黑旋風』一折)など。なお、最後の「腥衲襖」の「腥」は「猩」で、「緋」の意味。
- (69) 嚴敦易前掲書頁四三、参照。なお、「宋江三十六人贊」には、引用した以外にも、「太行山」が、「白玉麒麟、見之可愛、風塵大行、皮毛終壞」、「神行太保戴宗、不疾而速、故神無方、汝行何之、敢離大行」、「沒遮攔穆橫、出沒大行、茫無畔岸、雖沒遮攔、難離火伴」等と見えている。
- (70) 『會編』卷一四九、紹興元年十二月八日條。なお、元初には李全を題材とした『李鐵槍本末』という小説も、南宋の遺臣洪貴叔によって書かれている(吳萊『淵類集』卷四、「檢放度得故洪貴叔所書李鐵槍本末寄洪德器」)。愛宕松男・寺田隆信『中

國の歴史、元明」（講談社、一九七四）頁一九一～一九二、参照。

(71) 劉冬・黃清江「施耐庵與『水滸傳』」（『文藝報』一九五二―二一）。

(72) その質については、拙稿「水滸傳の世界―中國民衆の觀念的世界―」（『歴史學研究』三九四、一九七三）参照。

(73) 俞萬春については、前掲拙稿「清代に於ける演劇と民衆運動」参照。

(74) 谷口規矩雄『朱元璋』（人物往來社、一九六〇）頁六一、野口鐵郎「初期朱元璋集團の性格」（『横濱國大人文紀要』哲學社會科學一八、一九七二）頁一三。

(75) 陶宗儀『輟耕錄』卷三〇、「松江之變」、和田清「明太祖と紅巾の賊」（『東洋學報』一三一、一九一三）頁一四三、参照。

(76) 重松前掲論文（中）頁一三九。

(77) この呼稱は谷口前掲書に始まるようである。

(78) 『中國史における革命と宗教』（東大出版會、一九七四）頁七一～七二。

(79) 主として權衡『庚申外史』至正十一年條による。なお、この集團の研究には、野口鐵郎「元末のいわゆる東系紅巾軍諸勢力について―郭子興と芝廬李―」（『横濱國大人文紀要』哲學社會科學二〇、一九七四）がある。

(80) 野口前掲「元末のいわゆる東系紅巾軍諸勢力について」。

(81) 談遷『國權』卷一、至正十五年正月戊午條。

(82) 『國權』卷一、至正十五年六月丁巳條、高岱『鴻猷錄』卷一、「定鼎金陵」條。

(83) 劉辰『國初事蹟』。

(84) 鈴木前掲書頁七九。

(85) 拙稿「白蓮教の成立とその展開―中國民衆の變革思想の形成―」（『中國民衆反亂の世界』、汲古書院、一九七四）頁一六五、一六六。

(86) 例えば、前掲の京師の「百司健兒」の李孝忠の集團などでも、「有義兄弟十人、而姓李者皆立名連孝字、孝忠爲首、又有孝義・孝成・孝信凡八人」（『會編』卷一〇四、建炎元年五月二十一日條）と、「義兄弟」は、名前に「孝」の字を着けている。

(87) 宋濂『平漢錄』。

(88) 『明實錄』同年八月戊寅條。

(89) 例えば、正徳年間に起った「劉六・劉七の亂」の際には、「衣幟皆赤」の「山西盜李華」等も蜂起している。（『明實錄』正徳六年六月癸未條）

(90) 盧南喬「元末紅巾起義及其進軍高麗的歷史意義」（續）（『文史哲』一九五四―七）参照。

(91) 『明實錄』天啓二年五月丙午條。なお、「徐鴻儒の亂」については、野口「天啓徐鴻儒の亂」（『東方宗教』二〇・二一、一九六二・六三）、鈴木前掲書第七章等、参照。

(92) 『明實錄』天啓二年七月癸亥條。

(93) 查繼佐『罪惟錄』卷三一、徐鴻儒傳。

(94) 北京大學文科研究所『明末農民起義史料』（開明書店、一九五二）頁三〇二～三〇三。

(95) 謝國禎『清初農民起義資料輯錄』（新知識出版、一九五六）頁二〇八～二〇九。

- 96 「聞太倉有人起事摺」「太倉一念和尚聚眾起事摺」(故宮博物院明清檔案部『李煦奏摺』,中華書局,一九七六) 佐々木正哉『清末の秘密結社〈前編〉』(廣南堂,一九七〇) 頁六六~七七、參照。
- 97 「湖北荆門孫大有何佩玉等謀爲不軌案」(國立北平故宮博物院文獻館『史料旬刊』六・七期) 佐々木前掲書頁一九〇~一九三、參照。
- 98 『國初事蹟』,郎瑛『七修續稿』卷二、「本朝火德旺」,谷應泰『明史紀事本末』卷一、等參照。
- 99 狩野前掲論文、三田村泰助『黃土を拓いた人びと』(河出書房新社,一九七六) 頁一三五、等參照。
- 100 『清實錄』同年九月癸酉條。
- 101 『(民國) 崑崙縣志』卷三四(太平天国革命時期廣西農民起義資料編輯組『太平天国革命時期廣西農民起義資料』上) 頁四二。
- 102 この「李沅發の亂」についての檔案が、故宮博物院明清檔案部『清代檔案史料叢編』(中華書局,一九七八)二輯に、多數收録されている。
- 103 陳開らの「大成國」については、鄭佩鑫「大成國的反清起義」(『史學月刊』一九五八—二二)、上海小刀會については、坂野良吉「上海小刀會の叛亂」(『歷史學研究』三三三、一九六九)等、參照。
- 104 梁帖盧「關於『陳開自述』」(『光明日報』一九六二・三・二八)及び、廣東省文史研究館『三元里人民抗英鬪爭史料』(修訂本)(中華書局,一九七八)頁一七〇、一八三等參照。
- 105 「瞿振漢起義事略」(『浙南紅巾軍史料輯錄』)『近代史資料』一九六三(一)、「紅寇記」(太平天国歷史博物館『太平天国史料叢編簡輯』二、中華書局,一九六二)等參照。
- 106 『太平天国革命時期廣西農民起義資料』(上)頁二三三、一三七、一五五、一六〇等。
- 107 『(民國) 桂平縣志』卷三三、紀事下編。
- 108 「洪仁政自述」(中國史學會『太平天国』,神州國光社,一九五二)。
- 109 長野朗『支那兵・土匪・紅槍會』(坂上書店,一九三八)頁三三四。
- 110 長野前掲書頁三四五。
- 111 長野前掲書頁三四八。
- 112 三谷孝「傳統的農民鬪爭の新展開」(講座中國近現代史)五、東大出版社,一九七八)頁一四一、參照。
- 113 中國人民解放軍三十年徵文編輯委員會『星火燎原』(一)上(人民文學出版社,一九五八)所收。譯文は、新島淳良編譯『星火燎原(1)、井岡山への道』(新人物往來社,一九七二)頁一四六による。
- 114 『星火燎原』(一)下所收。譯文は、依田憲家編譯『星火燎原(2)、瑞金の赤旗』(新人物往來社,一九七二)頁三二による。
- 115 山本秀夫「農民解放鬪爭の新展開」(『講座現代中國』II、大修館,一九六九)頁一四九參照。

What the author of the *Shih-chi* intended to write was a history of one full cycle, beginning with the Yellow Emperor and coming to Han Wu-ti 漢武帝, the ruler of his time. Both of them, thought he, enjoyed the protection of the element earth; accordingly, he consciously tried to draw a parallel between the deeds of the two.

The theory which tries to explain the succession of dynasties in terms of the five elements is being usually referred to as the *wu-hsing hsiang-sheng shuo* 五行相勝說. The author of the *Shih-chi*, however, terms it as the *wu-te chung-shih shuo* 五德終始說 or the theory of five virtues. The *Shih-chi*, it can be said, was written on the basis of this theory and the Taoist philosophy.

### The Red Turbans 紅巾

#### —A Tradition of Popular Armed Groups in China—

*Sōda Hiroshi*

The Red Turbans are most famous for their role in the rebellions at the end of the Yüan. The custom of wearing red turbans among popular armed groups in China, however, had a longstanding tradition which had continued until the modern times.

As the late Shigematsu Toshiaki 重松俊章 had pointed out, the Red Turbans had their origin at the time when the Northern Sung fell. Faced with the advancing Chin 金 troops, popular armed groups with the aim of self defence sprang up in various parts of Northern China. Red being the colour symbolizing the Sung dynasty, some of these groups had their members wear red turbans or tunics, or flew the red banner in order to show their resistance. Since then, throughout the Yüan, Ming, Ch'ing and the Republic, the red turban came to be adopted as a symbol of national resistance among various popular armed groups. Even the *Water Margin*, the bible of rebels, reveals the influence of the Red Turbans. Some of the characters, for example, are wearing the red turban; the Mount T'ai-hang 太行山, their base, too was originally a base of anti-Chin guerrillas. The Red Turbans were so numerous among the rebels against the Yüan dynasty that the rebellions at the end of the Yüan are some-

times being dubbed as the Rebellion of Red Turbans. Rebels of the later times e. g., Hsü Hung-ju 徐鴻儒, the *T'ien-ti hui* 天地會, the *T'ai-p'ing t'ien-kuo* 太平天國, and the *Hung-ch'iang hui* 紅槍會, too often refer to the Red Turbans. It can also be said that such tradition is continuing even today, as shown in the attitude to equate the Red Army with the revolutionary army.

## The Dissolution of Communal Ownership in Java

*Uemura Yasuo*

Beginning the latter half of the nineteenth century, plantations by the private capital replaced gradually the *cultuurstelsel* i. e., the forced cultivation system as the main pillar of exploitation economy in the colonial Java. At the same time, the communal ownership of ricefields widespread in the central and eastern Java emerged as a major problem for the colonial rule. The government of Dutch East Indies attempted in various ways to turn this into a personal and hereditary ownership; the efforts, however, ended up eventually in failure.

Within the communal ownership itself, on the other hand, there was a tendency to have the members' share fixed, resulting in the growing number of so-called *comunaal bezit met vaste aandeelen*, that is the communal ownership with fixed share. Moreover, as the increasingly easier sale of the land shows, the restrictions governing community became virtually meaningless.

The communal ownership in Java, to sum up, was dissolved not in the drastic way the colonial government wanted, but rather through a gradual course. That the *heerendienst*, a forced labour system for public purposes, was not reduced radically was mainly responsible for this. At the same time, certain demerits of the communal ownership, for example its inability to meet with the increased production led to its dissolution.

All told, the communal ownership of land in Java followed the course to dissolution. That is to say that the conditions necessary for the partition of peasantry were formed.